

「幸せってなに？ならなきゃいけないの？」

あっ……もう一時間は、オヤジがアユのアソコを舐め続けている。

額を小刻みに揺らして、真っ赤なTバックのパンティーに隠れた小さなアソコの膨らみをチュパチュパと音を立てながら、オヤジがうれしそうに言った。

「美味しいね、アユちゃんのは……」

アユの太腿の内側には、オヤジのヨダレが混じった自分の愛液が滴り落ちている。

アユは17歳の女子高生。

みんなから、かなりカワイイと言われている。

一回5万円……文句を言うオヤジはいない。

オヤジは、少しずつパンティーの端をずらしては、見えそうで見えない状態を、もう何十回も繰り返している。

すると、不意にピンクのヒダがポロツとはみ出した。

「ああ、見たくなかったのに……見えちゃった……」と、オヤジが嬉しそうに言った。

そう言いながらも、オヤジがパンティーをずらすと、キレイなピンクのアソコが丸見えになった。

そして割れ目から、白い蜜がトロツと滴り落ちた。

それをオヤジが、汚い舌で美味しそうに味わうように舐めて言った。

「この蜜がなによりも美味しんだよ……」

そして花びらをオヤジが嬉しそうに指で開くと、赤く充血している奥まで見えた。

もうクリが、ほんのり膨らんでいる。

それを優しく摘まむと、クリがさらにボッキした。

「硬くなってるよ……」

オヤジは我慢できないのか、クリを口の中を含むと、優しく舌で転がした。

アユの体がピクリと反応するが、青い瞳は変わらず死んでいた。

「じゃあ、今度は俺のを……」と、イキりたった自分のモノを出して言った。

すでにドクドクと脈を打ち、^{きとう}亀頭が充血して膨れ上がっている。

その先端からは、もうガマン汁が^{あふ}溢れ出して流れ落ちている。

アユは口を近づけるが、なかなかオヤジのモノを口に含もうとはしない。

時間をかけて、ゆっくりと近づいていく、アユが息を吐き出すと「ビクン」とオヤジが震えた。

そこに時間をかけてやるのが、嬉しいのだと知っているから。

そしてアユは、唇からピンクの舌を出し、その先から^{だえき}唾液が滴り落ちて、オヤジの尿道の入り口にポタリと落ちた。

「あっ！」と、オヤジが思わず^の仰け^そ反りながら声を漏らした。

亀頭から親父のガマン汁と、アユの唾液が絡まりいやらしく流れ落ちる。

その汁をネットリと、アユの舌が舐めた。

「ああ……」と、オヤジの天国に登るような声が漏れた。

アユは、ピンクの唇を閉じたまま、ゆっくり亀頭に近づけていく。

そして唇を締めたまま、少しずつ口に含んでいく。

そのほうが、男は気持ちいのも知っている。

「……」

オヤジは、もう声も出せずにそれを味わっている、

んっ！……のどの奥まで、どろっとしたものが流れてきた。

最後に口で出してやるとオヤジは喜ぶ。

まあ、これで5万円ならいいかと、アユは思う。

「売り」が悪いと、アユは思わない。

<大人も才能を売って金にしている。

お客や会社に心を売って稼いでいる。

私も才能を売っているだけ>

オヤジのよだれと自分のとで、グショグショになった下着をそのままはいて、アユは外に出た。

今日は「ヤリ友」の健二のアパートに泊まる。

ずっと家には帰っていない。

アパートに向かう途中、歩道のゴミを掃いているおばあちゃんを見かけた。

タバコの吸^す殻^{がら}、投げ捨てられたコンビニの袋、散らばったゴミを、小さな体で大きなほうきを動かしながら、せっせと集めている。

ふと、おばあちゃんと目が合った。

『タルくない？』

自然と言葉が出た。アユの口癖^{くちぐせ}だ。

おばあちゃんは、アユの言った言葉が分からないのか、にっこり笑って、またほうきを動かし始めた。

このおばあちゃんとの出会いが、自分の人生を変えることなど、アユが気づくはずもなかった。